

## 岡部ゼミ 同窓会 2025.12.25

岡部朗一先生から研究のご指導を受け始めて1年以上が過ぎた頃、「私だけがこんな恩恵を受けていいだろうか」という想いが頭をよぎった。南山大学で行った「最後の同窓会」で中心的な役割を担ったAさんに、岡部先生が入所しておられる施設で「先生の誕生日会」という形で同窓会を再開できないだろうか、と相談したところ、先生がBさんと同じ誕生日であることが判明。だが今年はその日を大幅に過ぎている。そこで「クリスマス茶話会」はどうかという提案をいただいた。先生にお伝えした。承諾。岡部先生は現在84歳。企画・実行をする側も年を重ねることを考えると、毎回開く同窓会は、会って、近況報告をするだけで、先生を含め、参加する一人ひとりが「元気をもらって帰る同窓会」を目指したい。先生に、これから同窓会は「細く、永く」やりたい、と願望をお伝えする。承諾。12月25日のクリスマスの午後2時~3時の1時間ほどの「茶話会」で決定。施設の管理者、サポートフロアと連絡、ゴーサインが出た。場所は、岡部先生の部屋の隣の食堂。しかし、岡部先生は「みんな病気の僕のことを心配して、あまりしゃべってくれないのではないか」と心配していた。

同窓会が始まるとその心配が杞憂であることがわかった。「私たちみんな岡部ゼミで鍛えられましたから」という発声から、参加者は次から次へと近況報告を始めた。Cさんは県立高校を定年まで勤めた後、再任用で5年間教員を続け、今でも「非常勤」として高校で教えている。Dさんは海外勤務も経験、定年退職して、今はゴルフ練習場に勤務。来年のアジア大会ではボランティア活動に参加。EさんはDさんが同じ学区に引っ越してきたことをこの会で初めて知り、感激。先生との久しぶりの再会で感謝。Fさんはボケ防止のために、時事問題に関心を持つ、体を動かす、英語の勉強をすると三つのことを実践している。Gさんは自分の腎臓は夫から、と告白、健康の尊さを語る。聴覚・視覚障害者を支援するボランティア活動に従事。Hさんはスキルス癌で夫を亡くす。夫が残した会社で社長を務める。長男は同じ会社で働き、次男、長女は一緒に住む。Iさんは骨折して、生まれて初めて入院する。周りに病人がいる生活でいろいろ考える。暇な時間は手芸に打ち込んでいる。参加者は皆「老後」に入っているが、以上のように、「老い」との向き合い方は異なる。

岡部先生の訳書に『異文化とコミュニケーション』がある。その中に「動物が文化に対してただ機械的な反応を繰り返すのみであるのに対して、人間は文化に対して創造的に作用する」という箇所がある。この箇所に照らして岡部ゼミ生が「老い」という文化にどう反応しているかを検討したい。Dさんはマラソン大会に出場したいと言い、Fさんはフィリピン女性とオンライン英会話を楽しむ。「がんばる」反応である。Gさんは夫の腎臓で自分は生きていると言い、Hさんは癌で亡くなった夫の会社で重責を担う。精神的に、ま

た靈的に自分を支えている夫への「感謝」という反応である。Cさんは教員時代と比べると今は暇だが、いろいろな人の用事に対応していると「結構時間は埋まっている」と言い、税理士の妻であるIさんは、今は暇な時間は手芸に没頭する。多くの人々との「信頼関係」に応える反応である。最後にEさんは、同窓会に来て偶然にも同じ同窓生が同じ学区に引っ越してきていたことに驚き、久しぶりに岡部先生に再会できたことに「感謝」で反応した。「老い」に対する反応で最も大切なことはひょっとしたら、「小さなことに素朴に喜べること」かもしれない。(文責 木村友保)



参加者：高村寿子、宮崎やす江、渡辺規子、木村友保、松浦弘子、野口和枝

安井克己、 国枝由美子、 岡部朗一先生

\*岡部先生のお顔が横を向いているので、今後は木村が頭を持って「正面を向く」ように支えます。